褌と下駄を奉納する三哲神社

三哲神社の祭神は上総介千葉秀胤で、生前人々から三哲様と親しまれていたため、死後に祀った神社を三哲神社と呼ぶようになった。秀胤の父は天正一九年(一五九一)の九戸騒動で敗れ流浪していたが、流浪中に生まれたのが秀胤で、幼少から賢い子で、青年期に江戸に出て武芸・医術・文学を学び、一人前の医者となって三哲・玄秀と号し、人々からは三哲様と呼ばれ親しまれた。

三哲は猛獣を圧する威厳を備える反面、同情憐愍の心厚く、貧困者を救助し、医療にも貧困者には報いを求めなかった。寛文五年(一六六五)に大湯(鹿角市)に移り、千葉家に寓居して千葉氏を名のり、翌年十二所に来て医を開業するかたわら武芸も教授した。日々、一枚歯の足駄をはいてススキノ湯に通う姿は、変人の風ではあったが十二所の町の人々に敬愛された。

あるとき、国老梅津半左衛門が十二所に来て治療を求め、その才を藩主に伝えた。藩主は三哲を召し出して弓矢の術をためされ、その見事さに感動し二〇〇石で召しかかえようとしたが従わなかった。また、大工の術を学びに来た武田三益の祖に、大工は年老いると役に立たないからと医学を教授した。武田家が以来歴代医家として十二所町で続いた基であるという。

十二所城代塩谷民部重綱が重病のとき、三哲の治療を受け全快したが、約束の謝礼米を払わなかったので、三哲は年貢米を取り押さえ貧民に分けあたえてしまった。また、町の富豪佐藤儀右衛門は欲が深く、妻の難産を治

療してもらったのに約束通り代金を払わなかったので、三哲は儀右衛門の運送米を取り押さえ人々に分け与えた。こういう豪気反骨の三哲をけむたがる人々は、捕手を差向ける機会をねらっていた。旧六月一五日、十二所のある病家から薬代のお礼として酒と肴を贈って、だまし討ちにしようとの計画を立てた。計画とは知らずに大いに酔って大滝神社前の浴場に入っているすきに、三人の腕ききの武士が一斉にとびかかって押さえた。一説には急所を握られて捕えられたとも、急所を押さえていて自由に動けなかったからとも伝えられる。

十二所に運ばれる途中に捕手の一人福助に水を求めながら「蝦夷ケ森(今の三哲山)の前山に葬ってくれ。三年のうちに祭らなければ十二所の町を焼く。自分は日ごろの恩にも報いるし、仇にも報いる。もし自分の言う通りであったら霊があるものとして祭れ」といったという。三哲は官の取り調べに一切抗弁せず、六月一七日刑についた。町民、特に上新町の住民が願い出て、遺言通り蝦夷ケ森に葬り、数年後に神社を建立した。それから蝦夷ケ森を三哲山と呼び、社を三哲神社、三哲様と呼ぶようになった。三哲が亡くなった後、延宝四年(一六七六)の大火をはじめ十二所では、火事がつづいたが、三哲に懇意であった家は火から免がれ、捕り手や官の者とその家族には不幸が続いたという。

三哲神社の傍の手水鉢は三哲がつくったものといわれる。三哲神社には、よく褌と下駄が奉納されるが、それは、足駄を鳴して大滝へかよった三哲への住民の思慕であり、不意討ちのとき褌さえつけておればという住民の同情の現われであるという。